

俗語依存

高崎市立大類中学校

三年 牟田口 華愛

以前、友達と三人で映画を観に行った時のことです。まだ全員余韻に浸りながら、映画の感想を語り合っていました。

「最後の方やばくなかった？」

「それな！めっちゃやばかった！」

皆さん、何か気づくことはありませんか。私たちは、

「やばい」だけで感想を言い合っていたのです。

思いかえしてみると、私たちはいつもほとんど無意識に、「やばい」と口にしているような気がします。かわいいものを見た時に「やばい」、怖い経験をした時に「やばい」、何かに驚かされた時に「やばい」。確かに感動したのに、確かに驚いたのに、それをどうという言葉で伝えるか考えることをせず、「やばい」に頼りきつ

ていたことに、私自身全く気づいていませんでした。

俗語とは、今流行りの言葉や、改まった場では使わない言葉のことを言います。例えば、「やばい」、「えぐい」、「エモい」、「まじ」などがあてはまります。

俗語は一つの言葉に複数の意味を含んでいるため、便利な言葉ではありません。つい使いたくなるのも無理はありません。しかし、俗語を多用することで、日常の中で使う日本語の数が減り、語彙力、表現力が乏しくなっているように感じます。

ここで、俗語がいかに日本語の味を落としてしまうか、かの有名な『枕草子』に置き換えて考えてみましょう。

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる・・・」

という文章がありますよね。千年経ってもその情景を思い浮かべることができる名文です。ではこの名文を、俗語であらわすと、どうなってしまうのでしょうか。

「春はあけぼのやばい。夏は夜がやばい。秋は夕暮れエモい。冬はつとめてまじやばい。」

で終わってしまうのです。こうなってしまうと、もとの文のような細かい情景が描かれなくなってしまうため、美しい景色が頭に浮かんできませんよね。

先程も述べましたが、俗語の良さは、一つの短い言葉に多くの意味を含むところです。口調や表情によって意味に区別をつけ、瞬間的に感情を表せる効果的な表現のように感じるかもしれませんが、使う言葉の数が圧倒的に減り、日本語特有の豊かさや鮮やかさ、美しさを損なうという欠点があります。

今、私の話を聞いてくださっている皆さんの中には、別になんとなくてもニュアンスが伝われば良いじゃないか、と知っている人もいるかと思いますが、しかし、私たちにとって母国語である日本語は、人ただ単調なやりとりをするためだけのものではありません。初対面の人と距離を縮めるのにも、家族や友達に感謝の思いを伝えるのにも、きつと、短く端的な言葉だけでは足りないことでしょう。自分の思いや考えを表現す

る、相手の思いや考えを理解する、また、自分がわからない時に説明してもらう、相手がわからない時に説明してあげる、そういった場面において、言葉の使い方を考え、選んでいくことで、私たちが日々人と交わす言葉のやりとりはより豊かになり、相手との関係も深く、温かいものになっていくのではないのでしょうか。

俗語を使うことで会話は簡単になります。しかし、簡単にしてしまうことは、長い間受け継がれてきた日本語の良さを奪ってしまうことになります。だからこそ私たち一人一人が、流行りの言葉にいつも逃げるのではなく、自分が伝えたいことを表す日本語の使い方を考えていくべきではないでしょうか。

最後に、家族や友達との会話の際、ふと思い出したときでかまいません。日本語を大切にすることを意識しながら、少し俗語から離れてみてください。